

注記：本論考は日本国際問題研究所の見解を代表するものではありません。

## 日本政治外交史から見た現代世界の再考

Frederick R. Dickinson

(ペンシルベニア大学歴史学部教授)

2024年11月11日、日本国際問題研究所の大会議室およびオンラインにて、Frederick R. Dickinson・ペンシルベニア大学歴史学部教授を報告者に招いて、第3回日本政治外交史研究会が開催された。

本報告は、「文明」の比較や国境を超えるネットワークの分析を主とするグローバル・ヒストリーの研究動向とは一線を画し、日本の近代史を通じた近代世界の再考を目指すものである。

まず、「アメリカの世紀」・「冷戦」・「グローバリゼーション」・「新冷戦」という四つの概念の背景には、すべて「異常な日本」「脇役の日本」という日本に対する見方が含まれており、それは西洋中心主義の歴史にとっては有用であることが示された。

英語圏での日本研究では、日本帝国や第二次世界大戦に関する研究が優位な傾向にあるが、それは「異常な日本」という見方を維持するためには太平洋戦争の歴史が欠かせないものであるからだ指摘された。一方、そこでは第一次世界大戦についての関心は低くなっている。

だが、第一次世界大戦に注目すれば、「異常な日本」でも軍国日本でもない、西洋諸国と活発な関係を築いた日本の姿が浮かび上がる。日本は第一次世界大戦での連合国の勝利に軍事的や経済的に貢献し、また1920年代の第一次世界大戦後の新たな平和文化の構築においても不可欠な役割を果たした。

では、第一次世界大戦をふまえて再考すれば、太平洋戦争の起源はどのように捉えられるのか。維新を経た後の第一次世界大戦に衝撃を受け、日本は1920年代に国家の制度的な変革を経験した。この変革への怒りが満洲事変や五・一五事件、そして二・二六事件のような内乱へとつながった。このように、内乱と太平洋戦争を結びつけて捉えれば、右翼的ポピュリズムが台頭する現代世界への教訓を得られるではないか。特に、現代のアメリカ合衆国では、維新・制度的変革・変革への怒り・内乱という第一次世界大戦後の日本と同様の流れがみられることが指摘された。

結論として、グローバル・ヒストリーの意義は、地理的障壁だけでなく、西洋中心的な現代史という概念的障壁の超克を目指す点にあることが示された。アメリカ合衆国の民主主義は模範とみなされ、そこでは他国の政治史から学ぶことはないという態度がみられるが、実際はアメリカの民主主義も危険にさらされており、近代日本政治外交史が教訓となりうるということが指摘された。

研究会参加者からは、民主主義の捉え方や近現代における日本の役割など、多くの論点が提示され、活発な議論が展開された。

(作成：日本国際問題研究所 領土・歴史センター)